書　評・紹　介

早瀬保子著
『アフリカの人口と開発』（アジアを見る眼97）
日本貿易振興会アジア経済研究所，1999年，269pp.

近年，途上地域の人口増加率は全体としては低下傾向にあるが，アフリカの人口増加率は年平均2.6％という世界でもずば抜けて高い水準にある．とりわけサハラ以南アフリカでは1960年以降の爆発的な人口増加が数十年にわたり続いており，政府は人々に食料，住宅，教育，雇用を保障することが困難になっている．このようにアフリカが世界の人口・開発問題の鍵を握っていることは明らかであるのに，従来わが国ではアフリカの人口についてのまとまった書物は皆無というべき状態であった．それゆえアフリカ諸国の人口と開発の現状を把握し将来を展望する本書はまさに待望の一冊であり，1994年から96年までの２年間，アジア経済研究所の海外調査員としてロンドン大学公衆衛生・熱帯医学部人口研究センターとジンバブエ大学開発研究所でアフリカ人口研究に携わった著者にして成し得たことといえる．

本書は11章から成り，第１章「アフリカの人口とその特徴」では，アフリカの社会経済的特性（言語，部族，宗教，経済情勢）を述べ，人口急増の背景を探っている．一口にアフリカといっても，地域的多様性が大きいことに驚かされる．第２章「世界一高い出生率とその背景」では，人口増加の主要因である出生率について，その動向や社会経済的要因，政府の出生率に対する認識や対応を検討し，出生率のゆくえを展望している．アフリカの女性の早婚・皆婚と比較的高い再婚率は高出生率の一つの要因とみられる．第３章「死亡率低下とその要因」では，死亡率の動向，保健医療の改善状況，依然として高い乳児死亡率や妊産婦死亡率とその要因，最近の主要死因などについて述べている．

第１～３章で人口問題の基本状況が説明されたのに続き，第４～５章は人口の社会経済的側面を理解するための章で，第４章「アフリカ諸国の教育水準」ではアフリカにおける教育の発展状況が述べられ，ジンバブエを事例として政府の教育普及への取り組みが紹介されている．第５章「アフリカ諸国の労働力」は，アフリカの労働力状態について，とくにジンバブエの労働力調査に基づき，男女および子供の就業状況，インフォーマル・セクターの状況など，その特徴と問題点を解説している．

第６章以降は，人口問題において近年注目を集めている様々な観点に立ったもので，第６章「アフリカのジェンダー」は，アフリカに特有とみられる社会規範，文化，習慣のなかで女性の置かれた社会経済的状況に着目し，女性の参加を阻む様々な規制に対する取り組みや女性の開発を促進する国際会議の動向について述べている．とりわけアフリカに広くみられる一夫多妻婚の記述は興味深い．第７章「人口政策と家族計画」では，主要国の状況を述べ，家族計画に対するアンメット・ニーズ（未充足のニーズ）の問題など高い出生率の背景を分析している．また新たに導入された「リプロダクティブ・ヘルス／ライツ」概念を紹介している．第８章「深刻化の一途をたどるアフリカのエイズ」では，深刻なエイズの蔓延状況や政府のエイズ対策への取り組み状況，社会経済への影響などが示されている．第９章「都市化と国内人口移動」ではアフリカにおける都市形成と都市化の推移，各国における都市の定義，大都市への人口集中などの問題が，また第10章「国際人口移動と難民」ではアフリカの国際人口移動の動向と増大する難民の状況が論じられている．第11章「アフリカの将来人口予測」では，アフリカ諸国の人口分析に重要な人口データの状況が紹介され，国連推計によるアフリカ人口の将来像が描かれている．最後に著者は，アフリカでは人口統計の整備が最も立ち遅れており，統計システムの整備・改善が急務であることを指摘している．

本書は，人口のみならず，アフリカ地域研究を志す人にとって貴重な入門書といえよう．人口統計学の用語や人口分析の基礎的方法などについても，わかりやすく解説されている．　　（坂東里江子）